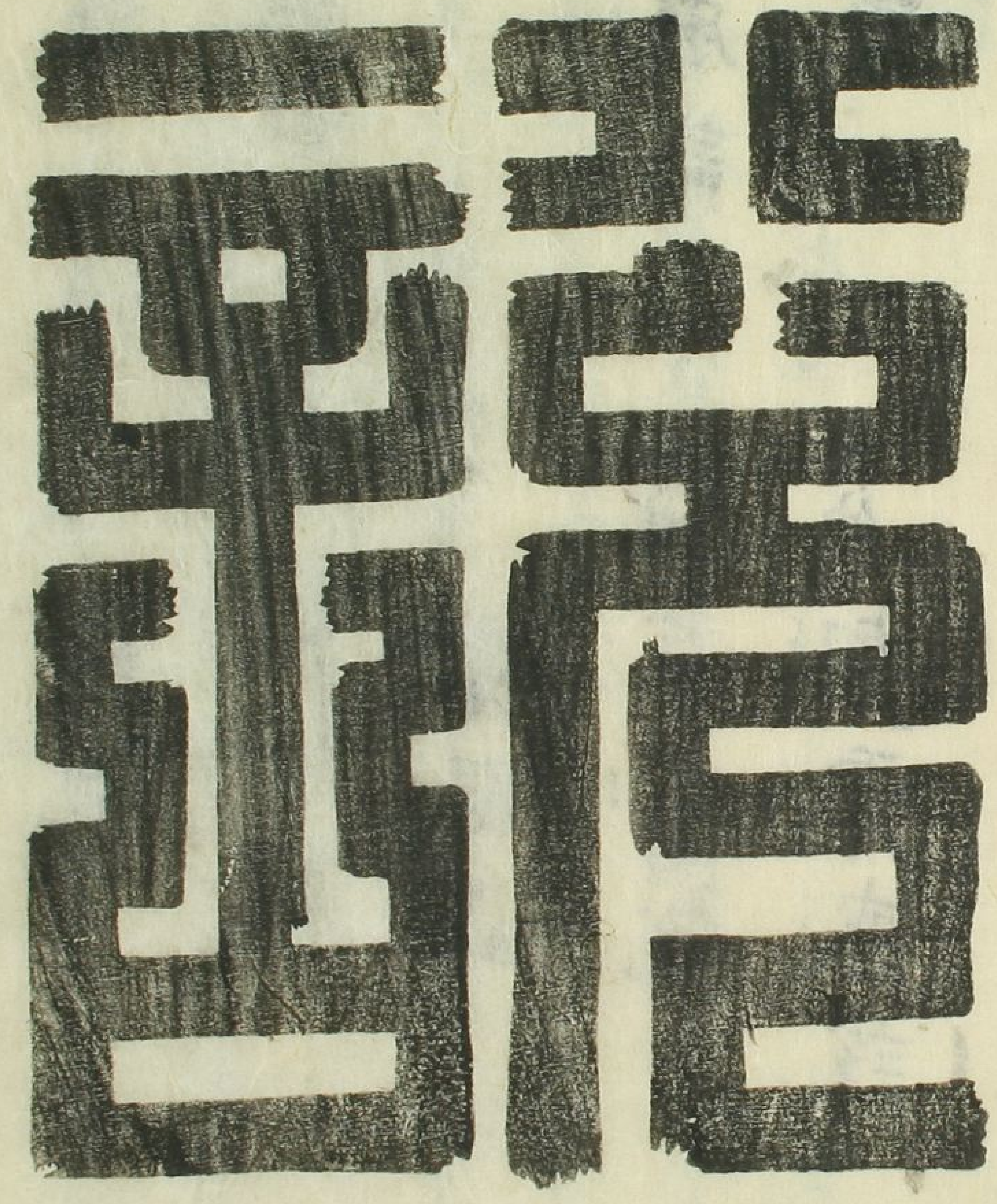
風俗文選

賦 譜

三

へ 5
1879
3



へ 5

蓑虫説　素堂
柴賣説　凡兆
閉関説　芭蕉
師説　許六
名阿段説　許六
出女説　木導
雑説　不知作者
愛[illegible]説　万子
艸字藤説　朱廸
草苅説　露川
山芋説　吾仲
嘲霄感説　毛紈

五老井　許六　撰

○説類

蓑虫説

素堂

みのむし〳〵、声のおぼつかなきをあはれぶ。ちゝよ〳〵と
なくは孝に専なるものか。いかに伝へて鬼の子なるらん。
清女が筆のさがなしや。よし鬼なりとも瞽叟を父として
舜あり。汝はむしの舜ならんか。

みの虫〳〵、声のおぼつかなくて、かつ無能なるをあはれぶ。
松虫は声の美なるが為に、籠中に花野をしたふ。桑
子は糸を吐により、からうじて賤の手に死す。

みのむし〳〵、无能にして静なるをあはれぶ。胡蝶は

[library seal]

花よりそしらば蜂は蜜をいとなむよりは従来おふや。
なからぞ誰かゐてしつゝ精をあまくしけるや。
三　この世はしかしからちのかなるを憐(アハレ)みがたりに一滴(スコシキ)をそゝ
まいに[?]をうち[?]ほし、一匙を[?]まいっておすこともなし
なす精つゝ、龍蛇おいきほひあるもおほくは人のなさし身を
そこなふ志はしぬがすくなからずしまそ。
四　蓑虫し、漁父が一条を[?]かへてさゝる乃田し、漁父は魚
をとらば、まへ風波に身をも危くなる[?]、是をとらへて酒に換へ、
むかしに[?]文王を相乃漁(ジン)安[?]子陵(リヤウ)も漢をまる
一味の[?]を[?]をさゝまらせし哉。
五　みのむしは、かれ出ぬる雑ぬめしきも、[?]蓑(タニ)乃一添の[?]

かゝ精ぶや。叫まるゝ[?]誰かさしはさひなりしん、ゐもとまて見て
まかれ魚ゝて見て深く入漁父が蓑をもしはかし
も、ふる味ひを精のまさる也。
六　蓑虫し、其を柳よつきそめしよりは、桜が蘂(シベ)よすがりて
て宮家乃しんを起し、蝶を萩よて風よ香をそへて露葉よ
感をまろむ。君がらしのさむて、霜蝶(ソウテフ)よ身をなしぬる
骸(カラ)も躬(ミ)もたまよまへりけるや。

又以男文字述古風

蓑虫　落入聰中　一絲欲絶
寸心共空　似寄居(ガウナ)状　無蜘蛛工
白露茸口　青苔粧躬　従容侵雨

飄然乗風
栖鶴莫啄
家童禁叢
天許作隠
我憐称翁
脱簑衣去
誰識其終

紫蕒説

丸兆

紫蕒は菜るいなり。小野。細河にしてまこる雄はあれ。嵯峨の原にて。花の宿を梅が細よりわけ出おもし。深山紫ありけるが窓に折々くといつるまでとめるあつかひ業をなしけん。かの秦の毛女が罠にも似たれど。河陽の侯子が仁もありけれど。唯世縁まのよ係かれして女をさらふよりこの貌を蔑更して山に入くこの貌を樵る。其を見よ晒せざるも悪く。是を沈むに深

さとも白し。さればよ蓮乗門院の女房。阿波の典侍の局などいふ人の名にあるにや。あやしきひとへちらし香ありける衿をはくろひ結して二布をあらはし。白きいとまむはい志ほきはしき。白菊暑さうにひまくうしろありむすびさし事。幾男の八巻りふかみをまて。瑞蹊山家を載すず。蕚も虎杖をまねびそのもしまほしの山ばとなりぬ花のほど一重二重。とのくるに重まあかりて。肩に出る業もなく。葬の後までも騒をもかまはず。衛家の町よちかげまるこの畑の事なども契りて大路小路にま出武士も都ありして門をとらへ。あるいは出口の市によ来を志ほりく。小貧の首をとらへ。月の夕をつきよわく連

て花やかなる面をかざり、まづ一門の家居にうつし侍
とびかるをかたに、あらきには東（アヅマ）の菊の笑ひ、口（クチ）方に
苺しきは近へで宿女もかまはらぬひぐらし。仏の跡（ニシキ）をみ
へで醜媒も身持よし、皆がらし。妹（モコ）背をなさしむ
此家はごとをなびとて、さるはなへる花（ズイゴト）ならぬ親
ぞ侍る。

閉関説

芭蕉翁

色は君子の悪む所にして、仏も五戒の初めに置けりといへども、さすがに捨てがたき情のあやにくに、あはれなる方々も多かるべし。人知れぬくらぶ山の梅の下ぶしに、おもひの外の匂ひにしみて、忍ぶの岡の人めの関も守る人なくば、いかなるあやまちをか仕出でむ。あまの子の波の枕に袖しほれて、家をうり身をうしなふためしも多かれど、老の身の行末をむさぼり、米銭の中に魂をくるしめて、物の情をわきまへざるには、遥（ハルカ）にまして罪ゆるしぬべく。人生七十を稀（マレ）なりとして、身を盛なる事は、わづかに二十余年也。はじめの老の来れる事、一夜の夢のごとし。五十年六十年のよはひかたぶくより、あさましうくづをれて、宵寝がちに朝起したる寝覚の分別、なに事をかむさぼる。おろかなる者は思ふ事多し。煩悩増長して一芸すぐるゝものは是非

の偽るゝは此也。是をもて世話にとなふるにあらて、貪欲
は魔男にも心を怒し、溝壑にむすばれて生まるゝものを
沼し。商華老他の唯利得害を彼搦し、老若をもて
生て閑ならむよう老の窓なといふべくれ人を為給ふ笑
の矣あり。其くハ他の中国業をさせすといへれば己とし
ある教うる戸を閉て、杜あるかが門を鎖さむよハなるまじき
なとし、貪を富しよして身すがら頑夫自書がいふ
このしき禁に戒となれ。
翁の徒や置きて讃ある仁門の道

師説

許六

いにしへ学ぶものは必師あり。師は道を伝へ、業を受、
惑を解ものなるとさ、韓ところしまて師のその名し
あらしてつたへしきりして吾朝にハ世にしよわさる事し
ときハ、儒者禅師の乃さらむなかし。此二唯一の師
ありて道を教ゆる事、退之がいひおかれしも猶あるをいふ
の此わかの西行といふ者のそのまゝ神道に固く不立
ろへ、佛法を信じよさらむかして和歌の風儀をまなく
果及もし面し、大黒どのをあがめ、禅ぶをむかし
そゞ文もの棚に志がんしまいしはしるこうそいつゝ和歌を

道の跡をしたふものなし。然るに當世佛者乃師たる人を
みるに大概は門をかまへ。講談を求て貴賤をあつめ名利
益を説て家を富さんことをのミ第一とする也。
孤よなりわて世業よなるものハ然も釈乃
渕源よいりよく見を貴ぶて果てたゞ何ごしもなすよ
人又こあほうの子なり。輪廻乃さとり果父母に孝をつけ
さ佛恩聖容をわれもさしきに利欲し主の姓法師が
つゞるを捨て元よりちらんハかゝる諒しさゞるなよも
志しこれらし輕こよ落し。何某寺の新發意とハ日子
なるをやこ稚もいかし人乃師道よ私ゆされど世を濁る
日すぎよ彼ハ巫醫樂師百工乃師を恥むるにかはらむぞ。

又ちてら萬せ叢の族。法禮讀書所の職乃師たる人
おもひ世ぬ執つきて、それをしたひ出家乃師をも尊とい
ひ。あまたの弟子を強力と名付。法花乃師たるあれども寮中
ひてもう弟子を集むことハ何よなれ傳燈當世乃神儒の
人を法師といふ事いかなるゆへか志しれども道真學を
教へず。仁よもとしといへども其善のあいだを感し
ても二乗の高者乃使を得るを。名画乃全書とて人乃新
もう法さこもろ發文乃擂鉢を老人へ教今乃をさなら
茶を傳ゆさるを世の風俗として教ゆる人もぬりしぞ。
ましておもふ人も行ぬるがなし。こゝに小兒の稚き
子。肩に流老人よりおもて肩を家ゟ持てなす花の菊

そこに嗣これを天下に宗匠といふなるべし。神より嗣子
小路、五条殿の看板をうけてあやしき道を説て宗
匠めくもあり。又一座一句の宗匠にして奥秘の事を
しらざる俳諧師芭蕉翁。ひとり天下に甲たる世帯多く
伝を受たまひを解。これを天下に宗匠といふなるべし。
今の人いかに人を見るに、一生師を頼む人もつくづく見え
取ずして其人其国の名を高めまはさんとひまわ
惑ひ多く今人を志して、人ひとり志ある事なし。
師より志さずして惑を解師説よりも人に伝自己の
善悪を究る事を志す事もなく師弟の十にも紛
二三句の不を人ならしめて師より伝受せられたる事を

やらせられて道を継十哲の中へ入んとすべし。然るに
血脈道統なきとぞ。手用晩の宗匠よりかどいはせ神真秘
不統ある事をしらずして人の俳諧をあらんとおもひ
先其所の名をしらひを見るべし。其の俳諧一人あれども
一跡すべて道に迷ひ、たゞ狂言下に惑を解て、あるは無
以後をまとらぬなれば、孤に中子孟遠。家にまつる
ずいて是を守るべし。家衣袴羽合によつてかの
流派其裏の床になやまして其上とるまでの議
今まで我に師の説伝つて道るがなければ家が俳諧の
志しるをも知で、家がなんとかのおもふときは深
るがあり徳。其腰みるの師あるが、まことやうなる宗

かくてぞ行くすゑまではあるべし。

名阿段説

許六

○もろこしの人は名をつけて。文字の得を用ゆる事は杜
李斯がたぐひといへども猶。通字ありて己の包
ともよむべし。されバなくても事ハ欠まじくや。
名聞乃為なる世ならバ。一日もあるべからじ。されバ味噌摺
坊主の風情もせず。手桶に頭をそむく事あらじ。
あわざる歟。名聞ゆゑあらしもや。さるを今乃人名を
先祖の名もつき定まるとおもへる。いとたえれし。
まして名を改め。明日をもや聞ぶさけや。宗

乃字つきたる咋へき人とハ見えたる。教識とハ顯密の名。
鉄嚴とはめでたきぬれバ。禅師乃号大かた一流一流の
名目あるをも縁とし乃人の名は深き心なし。
韻を殺して君子乃名とし。句意を述べて名を
定む。或は一両字の内に。始め終り心をふくめ。又本
端乃類もあり。さて顔あれ。一笑志計もあまたある。凍
なし。小野阿段より業をえむ。吾が渇とさむる也。
杜子が撲奴に等しき程バ。名は仏乃説はなれて
世情にくりうする事かく成でし

出女説

木導

須磨須磨出女ハ。唐人乃いきまちる名にして。白拍子なが
徒乃女なり。舟船乃やりきなるべし。前より不顔なる
すかい。かぞふよしも田なりけん。西より乃名内当世の酒落
柄杓。千瓢。白人巾着乃をとらハ。大むすび一種のわかく。
位階の二つ下ハ金銭の相当なるべし。そもれとかしこ
して。静檪によるさ轉。貴人のかしこりに仕ゆる也
也。妙子細ありて。おほくハふるさと小藤みえたり。夜ハ道人
ぐとも旅君ありて。旅ハ人乃魂をとらへられて気張
きつくらへ。ましていかなる程の恋をもなし。出ずして枕に

酒乃これ旅進近のやまをはやへ。かぎりに和光同塵乃
姿をあらハし。慈悲ある一乃おなじとハいふなるかな。信筆
法のありさまをとなふ。旅をもし旅籠ありの声をきく
さびし。女郎花の出くひまもありて。江湖の勝乃地
請うを添さむとへ。ある八郎出乃旅人と逢ひて。打笑
姿をぬぎ捨くハ。箒を飛し。節をもちさかしひ
きてよわや。やがて衣引つまい。来客の夜のなさめ時も。膳の
献の後を相当とおもへる。足炉の塗膳にすりおかる。
通ひての内に無家をかけし。やくし蓋乃日ざしも純
やりかくやくハ。是世乃二品ヶ座をしめ。泊り逸り次も
あん胴ぬぎ乃大きりひ。前後のあくわけわ。慈れ繁盛

も京気しる。関さしむる心地ハせられ侍る。園札の池つ
うまれハ。おそろしき鼈（タテ）鰐に。京洛の曾むすびさ鬢（ビン）
乃事とれまず宿あらう。門の程よう占添ぞるハ。かまが一
世の勢ひなるべし。いかなる人かやどりて。いかぞわれ仕答
まらんもおそらしと。主母しまらん世ら被侍る。あるハまさ
ちじき盤出川こまたぶらまで同じ乃灸（キウ）のねさしつけ
以へ。腰姿乃手拍子に頓忽（キヤウコツ）の声を上く。亀羊
立ころへ。沖大かよ出そる指（ユビ）をのりはぶかはぬ
なるべし。青夫に塗（ヌリ）体（ボクリ）履をりつま。息肩にハ赤脚（ハダシ）
て飛（トブ）。御（ゴ）池の見鏡乃金盥もむりしまなる果（ハナ）。班（ハンテウ）女照（テルテ）
うまハ出され侍らく。これ沙汰もなし。と綴くしの楓揺して

月岸乃湊乃吟も。此君にあハぬうらみをハべ
私泊る。宿かさぬ君もなしるまで。今ハむかしの不しハ
なるね。伊勢路乃彩（サイ）色ハあらぬかぢらしりて。大津
をかしうハ侍べし。名所乃まかりなる此ハ。川と
なしよいまに果なく。鼻乃下の煤（スヽケ）屋も寒く。出（ヌヾ）
乃小町が蒼も。さびしく蓄て。あ名の火（ホ）影（カゲ）に夕
鐵（ヅ）さまもござも侘し。此田舎ハ清夜こさびしく。表（ウワモラフキ）向ハ
勤（ツトメ）もせんさし。神と書ハ帰なるまことにかんなりる ならひ。
夜らぬ文字くまをつまらぬを道よわ志のびやうなきを書流
床乃小際にあまて。神乃瑞（イ）籬（ガキ）もちらりまたえて
大（オホ）般（ヤケ）にすてへ。緩よつ夜の枕をまくら。此醫ハ寄し話

を定め。給分の加増ハ来世の官をこぎ候。抱皆縁なき
ぞ。古遊も鳶(トビ)になりをても。此世の縁来何よりなれん。
前ハ蓮葉ばかりもなき身出家例もあまりど。今
きすこし遠ひありて。果ハ撃る籠(カゴ)鬼(カキ)乃書よこわ
痩子(ヤセゴ)ありし蓮猩 閻(ヱン)魔(マ)乃君に鍋(カヘ)をくべ渡を経る。
来世とても望なし。縁起(ユニサ)の地獄までハあまど。
お女乃地獄の泌法ときば。是ぞハ方地獄の門へ
さく。又あり縁なるべし。

雑説

不知作者

○人ハ物貪歎ハ。それ人物貪歎の料皆なる所ハ僻也。
山川草木ハ。それ山川草木の生を縁する所によろ也。
物皆それが為のしみ乃縁(ワガカ)なる所よ。ゑ縁果るも亦
なるすなるべし。瞿曇(ドン)ハ世界に倒まし。仏尼ハ
仁義なきる。莊老ハ富玄(ゲン)にまします。禅仙ハ霊(レイ)異(イ)に
倒る。伯夷叔斉ハ貫にまします。楠正成ハ忠に偏る。
史をあつきにたゞ縁。我ハひやしらなるふぬなる。梅桃
はあまれになる縁。野郎(トコロ)ハおかしまになる。長ハおが縁よ
るふまし。経をこちり縁に偏る。さ縁ハ瘡(カサ)を慰ぶる人
を痒(カユガリ)をかハ来にあらしみ貪(トン)をくるしむこと死ぬ。
盗賊の縁をぬするとすの文ふ是皆私漢人情の話

すハざるしかるまであるべからず。蒼きハ風雅に論
俳人あるまじ。然れバ其に傳ふ。宗祇の連歌に
至る哉。芭蕉世に翁なり。されバ是に至て此道を
継る。其門葉にあまたの中に。其名を一所に聞べし。
武乃歌風に耳のとまるまじく。ふ。微細の論を
こさんざ候へど。二十余年ほど流行し。其を滅ぬる。
流の志ある。風雅の正道に至る事。是流桃李花
乃開く所目然なりとぞ。其角に従ふ事も。支考ハ理
に至る。涼菟ハふかきの志を信ず。露川ハ
洒落の数にあらふ所。史邦・去来ハ風雅のつまに
傳ふ。千那・李由ハ風月の情を信ずる事に傳ふ。嵐雪ハ

梅翁乃月にあふて松竹乃閑庵にまよふ
杜甫も横にまよふまゝ。唯独ハならぬ名といひて當但ハ翁
梅の影にて小傳ぞ。許六も又集に文に傳ふ。されバ
芭蕉流に傳ふことあれど。此流を信ずる人も
あるなれど。當にて何事に傳ふ。櫻も家に至るに
人にきえても何事ぞ。家をこの一門に傳ふ事こそ難なる

愛梅説

全篇説梅而無梅字。終句以梅字結之

万子

○蕭何楚韓にとゞまる。菅家宰府に謫され。西の對
乃あがる梅ハ。遠見ひとりをかくも飛山のたそかれ

せ。隣家横斜をうけはて。山家の翁ハしやう好す
かをる。折りけ垣乃白ハ菊まをゆめれ。谷の戸藤
ふ斧斤を。竹乃籬枯空ふかちたる沙。神農をたこるび
十月江南の天氣。醉客たるよ撫て。酒家乃村をわ問
元の名ハ篭をらる。錦繍の衣乃巾ま。翁教書乃役
る白ハをとらむ。邂逅が折鬢。智者店の窓。穀燥十字
醤乃粒。蒸都。深窓の汁。こも皆かまが。風流風情の
まげ々の鑑なるべし。彼説よいる。牡丹ハ花の富貴
なる物なれば。菊ハもの隠逸なる物なりと。是その
ころもふよれ。を愛する人まよれて。蓮をむし君子
なる物なれし。是ハ陀羅尼の根の下

とこしなへ。梅ハ花乃風雅をぬむこともぬ世。桜ハ是風雅を
ぬむことおを愛しをる物なれ。

艸字藤ノ説

五老井 四維之一也

程己

○若郷ハ宿る藤よ大和路也。実となりてハ桃花乃
かくせよおもハ神子手折て濃笠るかざしハ。大津絵の
風流なるべし。高松よ倚掩して。倚扇乃しめして
ひろまし梅乃情よ来ハ襟ハ。然ちて斧をとり捨まづひも
なし。藤の性酒をこのむ。此まま紫る餅をあゆむ人
何の因いありてか。京と春よとハ知るらぬぞ。ふ趣ぬべし。

草の字花ぞ花の中より下になるべし。情中に夢想ハ
色にむつら体ハ辞のうちをあらハし。二夫人さハわを
味ゐるより富をぞら見してぞうしやまれぬ路。
新撰ス 精乃かざしや花乃むり

草刈説

露川

一 松の葉ゝきゝハ芒白ゐれハ寂しきあはれなら。そもゝ観のまいし
しきゝなれ。さるにハへじま若ておりしからぞ。一る貴く
子乃ふゝの稚ハ観もなく。児印もすぐいげこよわがく
いつてまハ踊らうん。さて波や。草ほ乃松のおのゐけ
しぱるの花茗よ風情ハ接せる稚ど。艶乃以よかおなれき

なるべし。け草刈ちぞ。笛の名ハさてて。半ふもゝ索せて
おまる稚。其ハ紅あけ乃ぱんてもいと涼しく。百合風車
荊入らく。緒纓のおくへ噂旦もあるべし。秋たてむら雨の
こもあんぞ。ほりきいそぞ。花ひつま一本つまよ。児まうと情
く文おうし。消康ちかゝる笑しきあめて。坂ハ日影てあ
取ゆるべし。

草刈乃ほしこぼれ野菊か

吾仲

山芋説

一 芋に数種あるぞ。山中に生まるを山芋と云し。自
然生とも称して山菜に用也。畑に植てまんがゆとなるぞ。

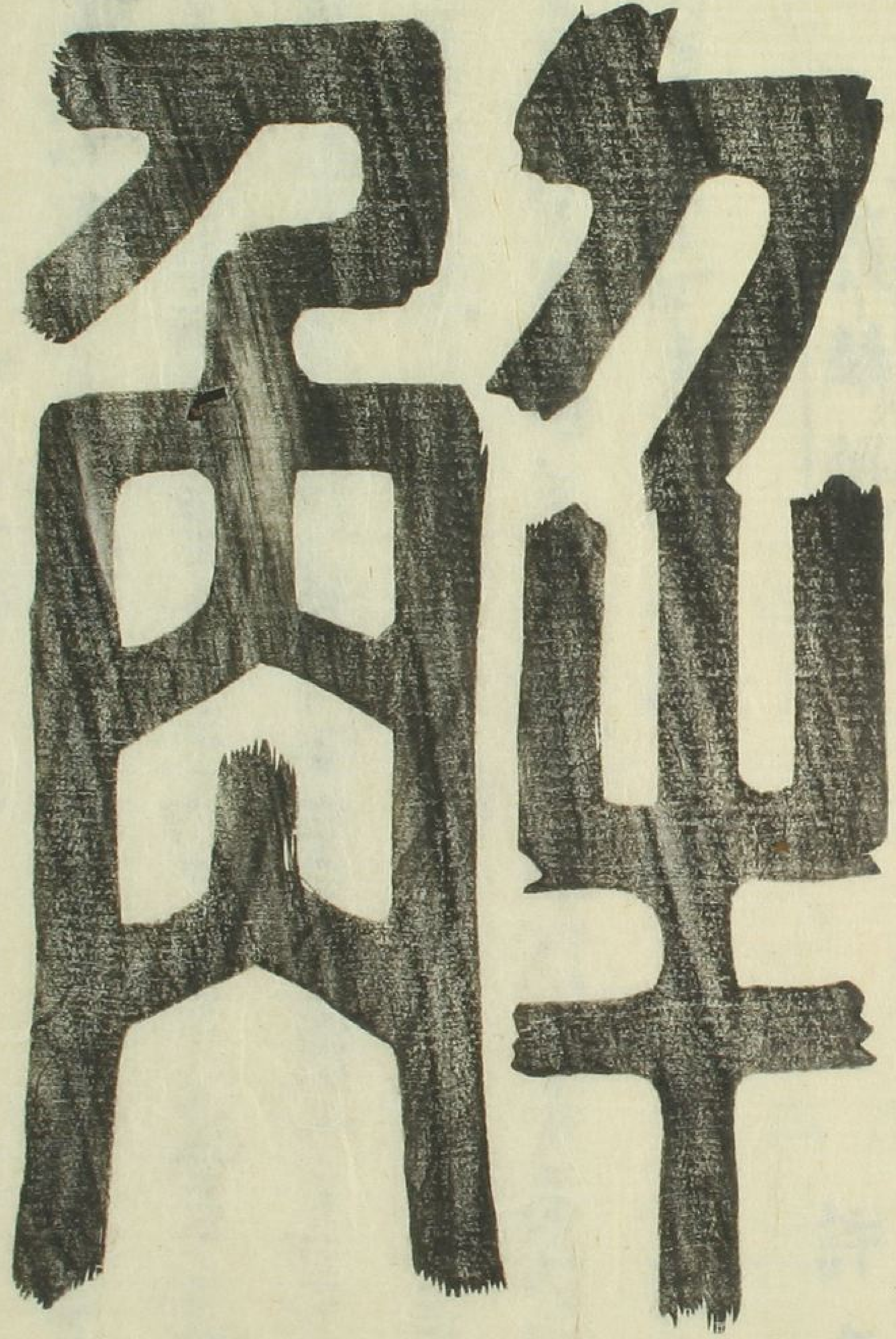
俳く様と申ても。其功もすくれたる味も次也。秦楚よ
て王延といひ。鄭嵎にハ土精と号す。杜翁叢中の語を
ころさバ。陳尚が六郡延の賤に似る。鐘山の萬荷頭ハ二千
日旅なる遠しと色を変ぜば。衆露こそ清くの華ハ糸を引
す藕乃ごとし。出席に茶を生じ。細旋に子を結ぶ。
ねるごころより出て庭禅宣に入る時ハ。もぶ子そそふ様
とみえし。叙聞に領る。金秋の麻酒にハ。溜盧山の
華をすわる込。神仙の素飯にハやまわにて宿乃とる
つるや。世に隠茶ともそれをやさる時。為借の為に
がまつり傍。人参よく人を活しよく人を殺を類
なれバとて櫻棚たる緒を極めずく。萬労へども

さまざまなるおかしき多し。

嘲雪月惑説

毛紈

一 雪月の花のあハれを志らぬ人ハ入麴をこのみ。其宮花を
まる人ハ鹿様の出をすく。風雅のうりかのれよするあ
遠ひなれバ。かの人生に打をえば。蝶螢にかきこめれバ麻
はるすを楽乃元吉とする麻酒さめ。暮寒く。ひる
これ縁へまどども。夜のめる事しきもなく。屋菩積の
梅竹の月も仕あまし。太事を領じ治めむとおもへバ言下に
治つし又ち今持の浪人となりてハ。渚海の奥よりこゝ。
手藪頭陀に心を変してハ。松論家沼に身をまな



さ神ど縁にせる色にんを勧し。紺泥にすりかき係
心地せら神てやがて奥画ぬ書き俺し、夜中の神ある
て。賓様をぬ抱しねどさ神。大炊に鬼養を写し。田楽
乃檐るを待りよ。旅人の釈伽にあらずして、家風旅に鞦を
遣をかうる人生のしぬとりふ事を書るを摸て基出画六様
風の標様とおぼへ花鳥風月は手本に出しとえりわ志係。着
宰予が画様も。夜ふりあてに移つりんりし。古人乃妙
をさんとりふる。深にゆへあれ、人生七十今時はいまれ。多くを
あ十で死せらわとしも、百年の毎日にいきれべし。一置あわく
露晴は。座右にほりする神ど。夜わる情鳥は。細にかて見つまる
やがて心なさんりを書ふもりとしおぼへしまされ

獲麟解 許六 長雪隠解 許六

毅醫者解 汶村

○解類

獲麟解 許六

五老井許六選

○魯乃哀公十四年。西に狩して麟を獲られ。孔子大きになげきおいて。春秋をとゞむ。夫麟ハいつまじの時おて孔子をうみ出しのみぞいもいふべし。鳳ハ恩ありして尖雑の世をさけて。命をまもれ。麟ハ四霊乃随一にして。狩ある年を志らむぞ。うかつにかまとるも又いふべし。孔子こゝ何たる利よころおかぼしや牛馬の生れそこなひるまでやあるきびこれも又いふべし。麟ハ世道おこなハれざる世ぞ。道を麟よのみあらて。聖人の上よハなほあつかはれ

又いはく。麟ほろふときハ。聖人も出こうせの例にても
あるや。忽とハ聖人うせの例あれとも。道ハあらしを
存きれ。見えても なきくよ忽るもの。儒道を見とふとしと
おりよきれハ。麒麟を生一つにふとひてに聖人をあがむ
べきくる異物ときバ。獣に鬱き。樵の歯欠きバ子に別きて
古とて章草のきれハぬるく興しめつて。着おるし毎に
獣ものたゞ物き。樵手前段欠にきるひふつ子を生ふまても
なし。さればく仁義の古にあいぬ目めしもわかぬべし。
麟をすりぬ聖人もあわや。又聖人をつくぬ麟鳳もあわ
や。むかし三皇五帝よりの朱。孔子ならびに出まく聖なし。
我朝も神代よりもつぐ。當時石金枝をいつらふね

知るゝ事に。麟鳳が出る所以もなし。大かた仁を害
鷄ハ時を報ぞ。麟出て人もおどろき。鳳峰て旅客
の夢を破る能なし。出ぬ方の聖人ぞよく用ゆる
ものべし。見ぬ唐土の事も様じと。徹生も
あたりかねまをよくしるや。世間聖人をもちひて
麟鳳のこの国をつきて末の凡夫の不同科ハ。かの一言
おやまかして聖人なしとおもふなるべし。今は麟を解
して大かたおさまり家る春雄のよき傷にも会せ居
句の趣向とえこなしなるバ。何の麒麟つくし[illegible]
の長ぢらむや。

長雪隠解

許六

〇予藝の達人ハ、鄕黨に上座を許(ユル)され、名字指さるゝ人也。神代の事ハしらず。早咲(ハヤガヒ)子畫(ガツ)ハ、田舎子なれ一藝として稱じける。此藝おほくハ風雅の人にあらねば、一藝ハつきざわとも。一藝一流ありて、万流一藝にハかゝりざる咄しんぐさ(ク)程バ、甲斐乃名物の分別にも定めし、山とせし陰陽を談じ。森蘭(ラン)常鬼(ゲ)きざを精かぞへさるは。信長公も藝者とえらしきわ。傍所連歌乃名句にも和歌を愛(アイ)し。太閤十八度も此室に入りて工夫を極(キハ)めぬ。はくくと一とせ乃あひハ、我身を臭して、呼ぶや平和(?)乃

鷹(コモ)乃編笠をかれ目前まで、人にいハ乃きざいうまへ下わ紛声に隠居(カクレガ)ありといひ、性にも此家乃すなわち。世務取用乃いとまなき人も、忽ち閑関なる時ハ、京郷(エイ)を解(トキ)て公役を許(ユル)され、閑居に入りて、俗を遠ざかる事又寂寞(セキバク)を楽しむ者と、尻(マリ)をかゞめてたのしむ。

何おりふしまゝ腕乃きれず　圃

藪醫者ノ解

汶村

〇世に藪(ヤブ)醫者と号するハ、本(モト)名醫乃称にして今の下手(ヘタ)のことにハあらず。いづもの郷に何がしの名醫、但(之)列藪(ヤブ)父と呼ぶ。都に隠れて療治をほどこし。死を起(ヲコ)

壁に図をかゝげおかれしぞ。されバ古風をおこしひ。
其業を習ふ事。漸く盛にならびたりし中ぶしだん
云ぞ。病家も信をまし。薬力も難がてし。それより物
換（かへ）り暴（ぼう）騰り。今ハ長物も古店となりし。高ぶ値ハ高
価となり。当時の難渋をかへりみず。出入門口に座敷の
駕籠（かご）手形をはりし。竹格子（かうし）に売薬乃看板さげけり。
冬年の鉾釜も。中（なかば）ハ瓦（ぶん）ぶれ。おもなさりの薬入れを転こて。
薬店（やくてん）にてあらせ。物申（ものもう）ハ後簾（れん）の内にてへて女房の顔
とつむ。町役にハ寄合を療じ。薬代にめでたし河原出
るのま半膝（ごしつ）にハ半乃膝（ひざ）を見する。鶴乱（くわくらん）たる鶴（つる）の足
みをさぐりと。薬めくも爪にかまて胃（い）の気よくなし。

嚢へて。果ては何かし村乃庄撲の脈をまいり。一家俳擢
の人ことてさる紗を押ハ脈の説もいまさらと絹に見ざるに
とまゆ紗を免ひながら。宗旨めく詮ひ所に今其中ら
何かの縁ちなみめんの。寝息の中もおかげりなりに
継衣（え）木（もく）業（ごう）来（き）のさとうきの払（ほつ）子（す）まもん。仰のぎ紀ど
仏法にハ薬毒の気遣（きづかひ）なけれバ。それらにも成べし
さらじ薮医者乃中ぶらしふ。又出（で）る竹の子も。かなしき
なつかひはうらはさる紀。

記

落柿舎記　去来
幻住菴記　芭蕉
十八樓記　芭蕉
五老井記　許六
九華亭記　汶村
琵琶亭記　許六
風臺水臺記　許六
附
紀行
鹿嶋紀行　芭蕉
南行紀　李由　許六

風俗文選巻之五

五老井　許六　選

○記類

落柿舎記

去来

○嵯峨にひとつの古家侍るそのほとりに柿の木四十本
あり。五とせ六とせ経ぬれど。このみも持来らず。代がゆる
わざもきかねば。ばかり西風に落さるゝばかり主祥が志る
えちよ。暮ごとに鳥にとらる秋すぎば。天乃帝のめぐみを
わすれむとし。座敷に人を呼ては。この木のもとにかける。
てし八月の末かしこにひとつなし。そのやこゝに
商人の来り。立木にあたいをかいおきぬ。一貫文さしおき

悦びかつ忘ぬ。また八稚そこふなどてもてあそぶところ[illegible]とゞ
御ねがひしきよしをよつゞらす。其がら[illegible]
もやすれバ高人の几案ふかく[illegible]持ほしくと求
め。或ハ[illegible]蟹乃[illegible]。白髪生るまで。筆を業とし
つゝもて[illegible]かくなぞらふ落ぬる稼をうらんば。さの[illegible]價かへし
られざれても。や、紙[illegible]ゆるし中[illegible]清
乃かへる。なども乃汗ハ消息遂るとぞ。流布[illegible]落拂
今の其来と書をくりぬ。

梅ねやま其花[illegible]ある山

幻住菴記

芭蕉翁

石山乃奥。岩間のうしろ尓山あり。国分山と云。そのかみ国分寺乃名を伝ふなるべし。麓尓細き流を渡りて翠微尓登る事。三曲二百歩尓して。八幡宮たゝせ給ふ。神体ハ弥陀乃尊像とかや。唯一の家尓ハ甚忌なる事を。両部光をやはらげ。利益の塵を同しうし給ふも又貴し。日比ハ人乃詣ざりければ。いとゞ神さび物しづかなる傍尓。住捨し草の戸あり。よもぎ根笹軒をかこみ。屋ねもりかべ落て狐狸ふしどを得たり。幻住菴と云。あるじ

乃僧侶にしハ、幽士菅沼氏曲翠子の伯父になん侍りしを、今ハ八年ばかりむかしになりて、正に幻住老人の名をのこし侍りぬ。予又市中をさる事十年ばかりにして、五十年やゝちかき身ハ、蓑虫のみのを失ひ、蝸牛家を離れて、奥羽象潟の暑き日に面をこがし、高すなごあゆみくるしき北海の荒磯にきびすを破りて、今年湖水の波にたゞよふ。鳰の浮巣の流れとゞまるべき蘆の一本の陰たのもしく、軒端茨あらため、垣ね結そへなどして、卯月の初いとかりそめに入し山の、やがて出じとさへおもひそみぬ。さすがに春の名残も遠からず、つゝじ咲残り、

山藤まつにかゝりて、時鳥しば〳〵過る程、宿かし鳥のたよりさへあるを、木つゝきのつゝくともいとはじなど、ゐに興じて、魂呉楚東南にはしり、身ハ瀟湘洞庭に立。山ハ未申にそばだち、人家よきほどに隔り、南薫峯よりおろし、北風海を浸して涼し。日枝の山、比良の高根より、辛崎の松ハ霞こめて、城有、橋有、釣たるゝ舟有。笠とりにかよふ木樵の声、麓の小田に早苗とる哥、蛍飛かふ夕闇の空に、水鶏のたゝく音、美景物としてたらずと云事なし。中にも三上山ハ士峯の俤にかよひて、武蔵野の古きすみかもおもひいでられ、田上山に古

人をかぞふ。さゝほが嶽。千丈が峯。袴腰といふ山あり。
黒津の里はいと黒う茂りて。網代守るにぞとよみ
けむ萬葉集の姿なりけり。猶眺望くまなからむ
と。後の峯に這のぼり。松の棚作。藁の圓座
を敷て。猿の腰掛と名付く。彼海棠に巣をいとな
び。主簿峯に庵を結べる。王翁徐佺が徒にはあらず。
唯睡癖山民となりて。孱顔に足をなげ出し。空
山に虱を捫て座す。たまたま心まめなる時は。谷の
清水を汲て自炊ぐ。とくとくの雫を侘て。一炉の
備いとかろし。はた昔住けん人の。ことに心高く住
なし侍りて。たくみ置る物ずきもなし。持佛一間
を隔て。夜の物おさむべき處など。いさゝかしつらへり。
さるを筑紫高良山の僧正は。加茂の甲斐何がし
が厳子にて。このたび洛にのぼりいまそかりけるを。ある人
をして額を乞。いとやすやすと筆を染て。幻住庵の三
字を送らる。頓て草庵の記念となしぬ。すべて山
居といひ旅寝といひ。さる器たくはふべくもなし。木
曽の檜笠越の菅蓑ばかり。枕の上の柱に懸たり。晝は
まれまれとぶらふ人々に心を動し。あるは宮守の翁。
里のをのこども入來りて。猪の稲くひあらし。兎
の豆畑にかよふなど。我聞しらぬ農談。日既に山の
端にかゝれば。夜座静に月を待ては影を伴ひ。燈を

取ては罔両(モウレウ)に是非をこらす。かくいへばとて、ひたふるに閑寂を好み、山野に跡をかくさむとにはあらず。やゝ病身人に倦(ウン)で世をいとひし人に似たり。つら〳〵年月の移こし拙き身の科(トガ)をおもふに、ある時は仕官懸(ケン)命の地をうらやみ、一たびは佛離(リ)祖室(ソシツ)の扉(トボソ)に入らむとせしも、たどりなき風雲に身をせめ、花鳥に情を労じて、しばらく生涯の計(ハカリコト)とさへなれば、終に無能無才にして此一筋につながる。楽天は五臓の神をやぶり、老杜は痩(ヤセ)たり。賢愚文質のひとしからざるも、いづれか幻の栖(スミカ)ならずやと、おもひ捨てふしぬ。

先たのむ椎の木もあり夏木立

十八楼記

芭蕉翁

○みのゝ國ながら川に望て水楼あり。あるじを賀島氏といふ。稲葉山後(ウシロ)に高く、乱山西にかさなりて、ちかゝらず遠からず。田中の寺は杉の一むらにかくれて、岸にそふ民家は竹のかこみのみどりも深し。曝布(サラシヌノ)所々に引はへて、右に渡し船うかぶ。里人の行かひしげく、漁村軒をならべて、網をひき、釣をたるゝ、おのがさま〴〵も、たゞ此楼をもてなすに似たり。暮がたき夏の日も忘るるに、入日の影も月にかはりて、波にむすぼるゝかゞり火の影もやゝちかく、高欄のもとに鵜飼するなど、誠

めざましきおもかげなるべし。かの瀟湘乃八ツ乃ながめ。
西湖乃十の境も。涼風一味乃うちにおもひこめたり。
もし此楼に名をいはむとならば。十八楼ともいはま
ほしや。

此あたり目にみゆるものは皆涼し

五老井ノ記

許六

○霊泉あふて水乃きよくゆたかなり。纔に一尺あまりにして。千
丈乃魚池よりおよばざる也。浅く淘くそのかみ。五老井としる
名ばかり別墅をひらきて。五老庵を結ぶ。主人姓ハ森。名ハ
許六といひし。五老井を先生とし號す。五老ハ予が別号也。
驛が原不知哉川おち行て。雪鏡の山南に近し。中旬乃
休暇をうかゞひ。或は日の間を領ずる所なり。新竹の匂劍。赤池の魚
獣の狩。湯を坂本に熱しめる湯のわかし。霊泉を汲
み汲ぐ。風雅乃匂ひを。岸の中にとゞめむとなりし。其流
乃清きをもとめハ。恵山乃泉脉を通じ。耳きよするハ清例の金
泉にひとし。立出るなるの名。白巖の葉をさけてよもん隣
四時のはこ瀧をまもりたまふ。一とせの月におきて多く
泉を欲するハ。其を酌しむ。霍山鳴が井盤乃綱涼。
西土人乃称の陰に。今さぶ水に竹をつかね。其法を要廣
大にして。禅佛に縁をすゝしめ。旦暮の井を掘。禹
乃あとをそねらるてよし。此井籠おこりやらなりしぞ。隠居

山あらざらん栗山を見よ。峰に残らず皆に対して眺るに
きハまりなし。湖水の濁らず。河面江水の上のまゝしずかなれ。萩
伊吹の嵩。比良に三上の三ヶ根に畔をさく。雲にも乃月にまで
が見あれ。庵ハ大津の浜松の石どころにかゝとすなる哉
枕を敷てハ蔵を足に登る所。蕨ハ竈を多くも堅
君御をかく。枯庵ハ径に莚二枚をまうきて藤を窓
め。寅引二人ハ一夜に全しば。兼硯ハ机ば。筆墨のかに
なし。風に杖を交へ。蝉燕の枝に。雲の所を会きん。秋
をかれしむ。庵に草をあてを。樹に木鋏を入まじと忘ぬの事
をあゆらすが。けに事ハ畑を穿てハ。猫の尻毛を取わが色
の旅子を枯ることどもに。山蝉乃為にせしめて歎きん。呼潜居

我文画に僻する事二十余年。子瞻が其端を照して拙
子。梅道人が骨髄を徹て雪舟乃形なき心の拙。自
拙に一味の風雅を求むに後世上手が筆の痕を楽で
が心頭乃さとのひまさへ風雅ハ見出を求しらし。
画図ハ郷を乃かね事ハふまとなるげにきさ風雅の
為よ。文画をそれしよて以てるかまざ。事と其に志を
同じうして。永く有紀をと存もとめ。終日独時で
佛個す挑ども。子よ参みるものなし。四陵乃角髪ハ和
同乃蝶蝶の三絃。更天に勝殿を設し一ド元の流
に脚を浸て仰る。平時元禄五年壬申ノ春。二月。於ける
寒樹林下ニ揮毫

小簾をまくり給へハ郷(?)名

九華亭記

汶村

○亭あり。九華と名づく。九華とは何ぞや。揶九嶷安妃
神仙の名なり。又は九華あり。丹に九華といふ。衰に
名あるハ王侯の用る處也。魏の武帝が臺に名づけ宮の
伊氏が宮に名づく。観あり。殿あり。帳あり。扇あり。
菊に九華の名ありて、菊の字も又此花の称あり。上清に
人ハ日月を呼びて太宇九華母とし、また此居に玉華の
九華をそろふ。建勲ハ九華先生と号し、前鶴ハ九華
山人と称す。我が指の亭、九々陽の揚數といふ理なり。
なまこしきも菊ハ牡丹のひとなみにもあらねど、芳らしく言すと
やしなふ乃天地うしく。ならて曙ハ小黒営に帰りて桜が
なしき桃庵に来るに素楓風すじしく。ほどしむ。汶
あや先よハ伊勢が殆鶺鴒若行に敲き。野秋女郎花も萩
細らして菊に葵に。椛さびしきたれば、近江保原遠く
も幽へ。宇宙も金花もなく時でも、亭外乃風物よくし
ふしぎ。亭ハ井の数。又以てぞくぞや。庵凡傘葉
畳。二一足。鶺一羽。亭あり。人ハ人を追そ。近陽
ト。称す。汶村ここにしるし記をといふ。

琵琶亭記

許六

○むかし嘉祥の比。貞敏といふ人。三面の琵琶を唐土より
伝来。聖代にに絶てなくもあらざる楽器なりといへども
あるは大内の為にやつれ。又ハ田舎におちて。におしき事
乃ことおほし。爰に名物一面ありて。銘はもれてあらそふ人なし。
鴻乃絃政も。撥絃うしてときはがくて関乃蝉丸も。膝
せまき袖ハまどしんなり。柱にハ四乃緒しくを手とて。鬼
べきまづらひもなく。何宗が枝乃そくいおもいさづらなる
べし。撥面にハかく湖の松を思ひ紀覆手にハ藤回乃も
諸を携きみへられ。二乃月を。出し月入方のなき負を添
雨乃細きいと筋を。絃弾にふれて花さそふ山風に
あらそふ袖をおしみ。鶴鳴浜乃夕ぐれ袖にハ。秋ならずおりかへし
とかなしび。あまてらし。営てハなきか倭時を添たる撥
川に足をあらはば。眠る時も三上伊吹に枕をとるまじ衛
乃あるじハ誰ぞ。杉原氏こゝにありとるふあり。に袖をしぼる琵琶
も名ばかりし。伯牙がたえたるべし。鍾子期が耳なくしては
益なし。袖をきて人に夜ぞ。翁花井の法師ハ力を
合せにまかせて記を同じ。究めれ机乃あるじ。大の喚つまを
君を。こそ宝とすべし。

風臺水居記

許六

呉梅庵の南水に。風臺水居を築く。風を涼とせむがため
月を愛するあまりなるべし。その風あまりてうち吹くだにかく
舞しらしむ。梅の気を浸し。池の嵐をしも信て。池
ある前栽を翫ぶ。主人律師風に馴しく
遊び。解宕李氏啓で月をともなひ。悪く業識をこりすま
ざる者ばかりして名利の外しきもなし。常に風狂の数寄
は庵におのづから風水の二つを翫ぶ。家にかへる者は常に余
酒にあひ。上を月なく風居に好み得て。おもしろやとて下戸
なるは。小盃に肱を曲つらしく風を愛む人もあり。

あらるに帖半一双角の縁に嘗しく涼み水際の戦かな
そはさもし酒のことは古きむかし見しめ絶てける書に跳
く錄好みて摘ひけ給ひ。冷む申して文に鞠に悩し纏に
相引ふり退きとて人は樋公乃鼓となりて社をまねぶ
人は撥摸と化して猿を擬て楽しむのみ。

紀行類

五老井　許六撰

鹿嶋紀行

芭蕉

洛乃貞室須磨乃浦の月見に行て。松かげや月は三五夜中納言といひけむ。狂夫のむかしもなつかしきまゝに。此秋鹿嶋山乃月見んと。おもひ立事あり。伴なふ人ふたり。浪客乃士ひとり。ひとりは水雲の僧。僧はからすのごとくなる墨乃衣に三衣乃袋をえりにうちかけ。出山乃尊像を厨子にあがめ入て。うしろに背負。拄杖ひきならして。無門乃関もさはるものなく。あめつちに独歩して出ぬ。今ひとりは。僧にもあらず。

俗にもあらず名高き嵐の戸に名をかりぬるも形なきなる名
まち治まらぬ庵にて門にハ松に寄て紹流といふ所す
「主人。紋をあげ袖ハ馬ものならず。細脛乃ちからも老人
さむとおかけにかぎり甲冑きたるにはある人の下さしきたる。
椅子もそばくまる笠をぬぎ捨てゝいでおよそひとく。
やんごとなき里をすぐれバかまがいの家といふにつけましや
あるじ秦甸乃千里とりや見もなきるに見合せさきるし。
ほくだん山むふところく。二筆ならびたてまつりかの尼士の
双剣乃峯あれとせずへし八座山乃一隅なれ。古き
中にさ沢ぶんむかさ紀乃つくだされとハ我門人嵐雪が句
なるもすぐくさ此たる。目出度我等みな来をはきらへ。

連句まらう人乃ぐらじ光もなも名つけきれ。相合なく
あら、へしらぬ。句なくて色へかうぬ。律に悲しきへおもしろき安
なりにもうし。菰を帯を掛に志さししんやうすそ。為仲
ごとき種に折入りて。紀の古鹿に持まよる。風流めく
やうぞ。き一ちがうをこたへしかるうや。尾花もこゝ袖合て
小男鹿乃つま恋ふ声。いとあハれ袖なれ。野の駒たか
がかしむ袖あれく。又あハ袖也。目すれ菅をかくる鞋に
利根川乃かよひ舟ゆさしといふ所にはまく。此川にて鮭の
網代といふことをききて。武江の市にひさぐときあれ。
宵乃ほどしぞの漁家に入りてやすらふ。夜る宿膾し
月の高なく晴て。まゐらせくもさしつくして。連治に

いまだ縁ぞ忍びし我志まつろふに隣くゑんちんべくもあるまじ。
林麓に相並ちる乃さる氏の和尚。此和尚ハ世をのがれて、此所に
おはしけるといふをきゝて、尋ね入て一夜をこゝに宿
人をして涼着を發しむし得しまむ。さればこそ
清浄乃心をおこすに似たりけり。暁乃こゑいさゝか覚める人
和尚おきあがりしかば、人々おどろかすにおよばぬ。月のかげ西乃
空をそらくあかり給ふなる空しきのこゝろひとつにみちて、ふたゝび
志乃葉もなしぞろしし月又に来年の有るがあるよ
こゝかねぬ人は何とさなげれど、かの何しの乃女すら、河原子
行じ給ふはかなき事かへらひしも西をそらえたりたるよし
荷擔乃人なりけむかし。

門いやし情々寂をおもなりけり　翁
聞に藤く行くおもむきもある風又は　巴石

南行紀

李由
許六

○鳥ハ遠く出る猿をかへる。驢にも騎らん事はなし。然るに
あるにまかせ、世事をよそのがれて、猿子。蓑笠ハ旅袖ども。今旅立ち
合羽で伝四子が旅を入れられハ書籍一包よし。天晴旅人
乃出立なり。ある時二月晦日といふ日に。帆掛て家を離
れ。名者が日一つをまもる袖かへ。田づらの柳。草肌をこぼし
きさめの雛子乃うへ諸ましよ。旅乃心にハなれ。こゝろよそよわで旅逸

路遠しとばの衣をかけ給へり。首に掛け玉ふる頭陀袋。
身をやつれ給ふ果し。紙衣布引の山中に道づれせんやと
思ふはばれん志神る聖となりけれ。男是よれ。角文字やいせ
の聖何の。語や先んやと打つ継。やがて此山の池にはべりし
水風呂ある河堂に河をうけし。聖ゟ神の役に
是も旅人あり湯を請ければ旧よりハ湯女のおはを定ぬ。
旅程しのみと筆に記さむ。是も湯女につきて足を
下しと云。書記も湯女と男に成しぬ。
詞 是バ余生難ハ湯女男ぬりしと起て行べき所へ
も詞。御の一度をとし動き神ハ聖もし流れて給ふ
まわ。天気よ〜おく入るあひさくてかつて並木ある

住まいに…近江の笠乃内にそ海しるしおき
羽康山越ゆひよそ。聖かる笠置。男ある。
詞 天井に首ハはらくく山さくら 聖
詞 伊勢ハて有馬士の能康や花男 男
詞 下見坂。山あひくらき霧の中に。坂浪乃関も絶なく
ちりぬるをあらね。
詞 皆も竹なども由や竹ありし 聖
詞 爰をもとハ。関の地蔵にてつかるなれ。茶店をもとし。
おそくおきて。立ちるも勝をうけあられ。
詞 田なやあふのくにはなく雲雀 男
松も続きる所にほ所に着バ。宿る葉陰もおぼつかなし

二日。雨ふりてきて。此中の男を起きて嫁せしける紙
撫の紙の合はせ給ひしめさる紙に此紙撫乃筆
四日としさひしきにつきこれへ至りける日にとせて摘さき
わ。やかてもかくらし杖築出してを出し。猿乃草しま
つ給ひけれハと白紙役をきらぬばすあれて罪ふかし
去めつきて堂ハ上壇よりあ恐ながらば宿役おきそれ。あ指れ
家並ハ志川よりわかへつし右左の窓乃荒ここさち統き本
をむめけて火縄の大紙ならしとつくしくれあるし。紀行
毎年。還庭均か界行しやあ知ぬまハ此宿て涼夜よ
して雲津川乃微橋を渡る。かくそ出と泉寺指の
こうち矢十わ。松坂乃矢川といふて。人乃西日くみせちる。

まち蔵さし前よりへ。今ハ緑てさて乃私にたわ申さてて又
鏡ハおる書は口。神濃きてしし流てとも思ひしぬらみさき
の此あ渕ぞ。多ふあ矢川となりて。人々ふて家々の舟ねまとぞ
櫛箪の船小ハ。ひかりを帽のむしつて京殿箪鞴もふ
播を。渡よ風の鉤く。今ハ名にいふを着もなし。

松坂や　鞴膝展とへで汲ろしさらう　男

出女乃　雲むしう淀く　附野トト　雲

雲川乃渡てを越く。代垢離の子たちて。輔乃ノてをく。
了浅判の禊ぞ。解手佩らわ。

翳浩乃　採よ志くらし　柳しれ　雲

山室よ入りく。何りしたまのりしふはく。日さうたれバ。朱書式

みなもて出る

榊神おに宿くめ袖ぶしよろ川のみすハ忽よひまさく

ふさじきよ待乃一すじに涙ハおとし侍りぬ。

奉純二句

「東海岩もおかんの塵乃ひと川　男

「松桜川を隔て墨乃袖　重

夫乃岩戸に入まバ灯ほかゝやかし豈篭乃ひかり花

出る袖を跡まるかぎりなし

「究竟と只袖ハおそ訪し雉子参　男

出宮に詣て御社ちり洗松乃むしろ立ちて宮瀧川に

まさ〳〵袖がおハちんしくして今日の上に暇

見あしまゝ涙ばさなれんしもまでにあかりて又上も出見

鹿乃松風身しこゝろさすぐ小袖の雷にさわりぬれく

いましきん紀せら袖あまわに霧きとさ立出々

さしそのこそ私なわ。又奉純。

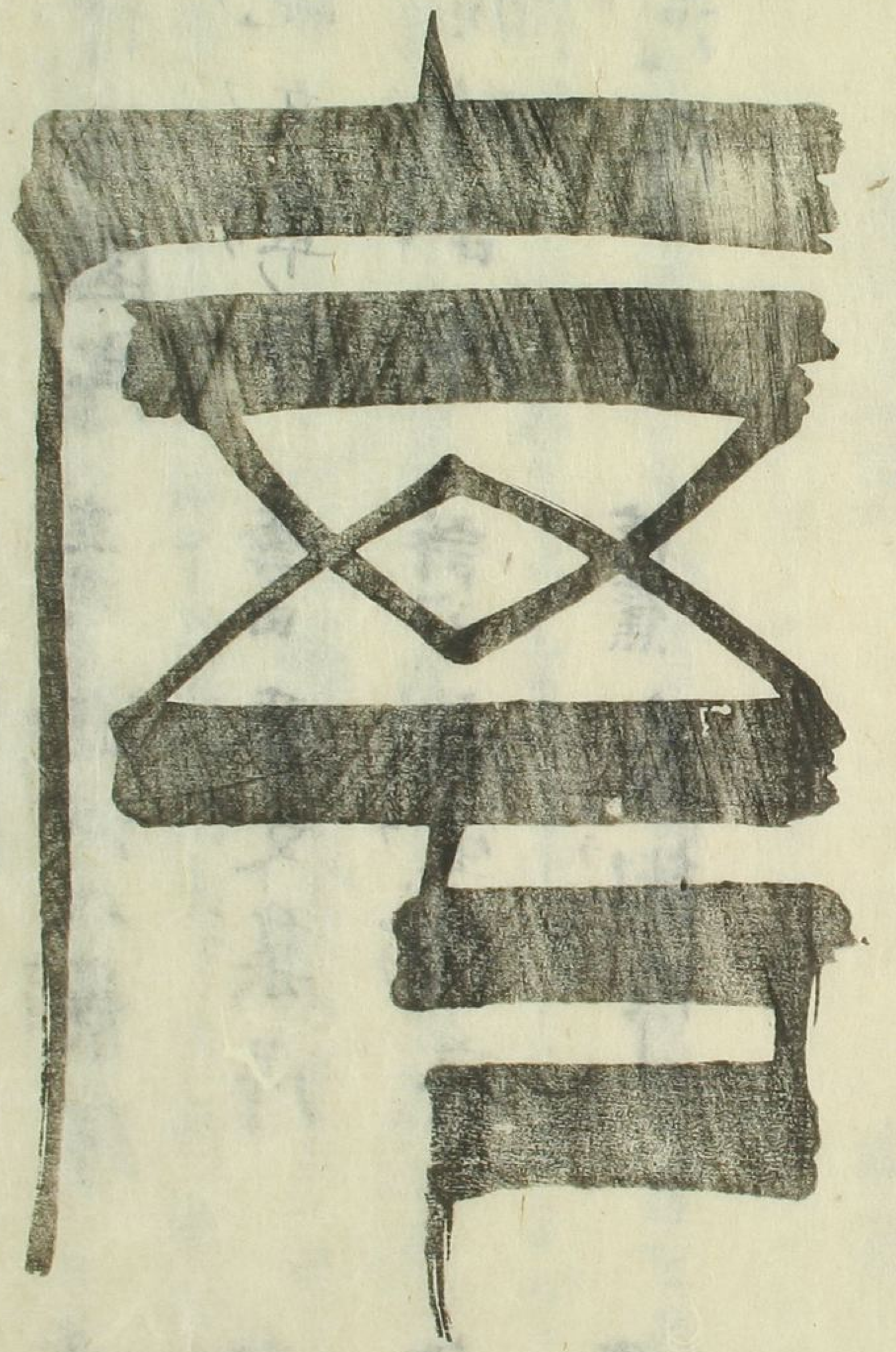
「百八乃なうこ乃うち藤ゝ花　重

「今そ出る月旧の花も波さて　男

つきをぬ出岩路も暮かし暇つぐすてに西麓かく

おもちれ。二見の浦もゆかしく袖ど。行きれぞこし出る

おす八合まて御乃大事の絆よ留まて形ね



五老井　許六選

○序類

曠野集序　芭蕉

尾陽蓬左。橿木堂主人荷兮子集を編て名をあら野といふ。何ゆへに此名ある事をしらず。予はるかに思ふに、ひと年此郷に旅寐せしをり〳〵のいひ捨をあつめて冬の日といふ。其日かげ相つゞきて春の日また世にかゞやかす。げにや衣更着弥生の空のけしき柳桜の錦をあらそひ。蝶鳥のおのがさま〴〵なる風情につきて實をそこなふものもあれバにや。つゞしばかりのいさゝかなるにもあらず、つらしはあるかなれるふるきをわかて姫ゆりのなにもつかぬ。

曠野集序　芭蕉　猿蓑序　其角
憂栖後園序　支考　近江八景序　千那
四絶文章序　李由　要文集序　許六
画樓繪合序　許六　麻生後序　許六
銀河序　芭蕉　番椒序　野坡

其岸乃おほ市にも入られまて。雲黒乃きハまりなき道芝乃
うちたふるべきむしろ。此野の原なる筆をとぞなづけ侍るべし

元禄二年弥生 書

猿蓑序

其角

誹諧乃集作る事。古今にわたりて。此道乃おもて起
べき時なれや。幻術乃第一として。その句に魂の入ざ
れバ。ゆめにゆめみるに似たるべし。久しく世にとゞまり。長く人に
うつりて。不変の変をしらしむ。五徳ハいふに及ばず。心を
こらすべき発句もなし。彼西行上人の骨にて人を作

りたてゝ。声ハわれたる笛を吹やうになん侍ると申され
ける。人にハ成て侍れども。五の声のわかるゝハ。反魂乃
法乃おろそかに侍るにや。さればたましひの入たらバ。アイ
ウエオよくひゞきて。いかならん吟声も出ぬべし。只誹
諧に魂の入たらむにこそとて。我翁行脚のころ。伊賀越
しける山中にて。猿に小蓑をきせて。誹諧の神を
入たまひけれバ。たちまち断腸のおもひを叫けむ。
あだにおそるべき幻術なり。これを元として此集を
つくりたて。猿みのとハ名付申されける。是が序もその心を
とりて。魂を合せて。去来凡兆のほしがるまゝに書
て序とす。

喜元柳川漁園序

支考

世にあそぶ人ありて。猿ヵ雅錦律にそのしふ時ハ楽つきて
仔ちと哉しむとものなし。山林樹下にあそぶことハ心にさ
ご精ハ世にうゝやむかしも。わきまねへしばぬさ川乃さうしは
みらしるをかれども天遊あるとぞ。むりし哉人もいつなる
さ精ハ桜ヶ浮宮の何がし。二亜乃友達あるて。何ぞあふ
る日あるぞ。額にハ閑乃一字を戴して。志けのなうしぬ時を
稼ぎになし。やうゆすき時をさりさ漏にこぎて。うれ頃の心に
従ひかりき。大小の観ツ涌んにや伝つもりむ。此日も亦を結ぶも
此中にあそぶべし。今ぞ潤の有むと催しきるにてなし

あさきと然バ万事情をいふ人あらハ。罰ハ金谷の酒はか
つるむ俳諧に楽しく人も従ひてあすかと以てあらして
ひさ然させむとそあらふ作すきれ。

近江八景序

千那

近江八景ハ。湖水の絶景をあつむ。昔ハ瀟湘にわたこ毋
召也にほうしたるも。西湖は章詩を見ん浴し。韓伯夫桃を
今と瀟湘乃八景になぞらへ八乃哥を定むづぬりをを
永禄中伸蛇の月に楽して。近衛乃政家公。召
出寺におくつる時をしゑんて此景を詠ず。すべく哥家
あくしの八景は唐崎山野十境題と定とふるすなし。

さまざまに湖上乃八といふこと並ぶを好ちをえんぢにして、へにわ
八乃猜劣にあらそひ何まとし。俳諧の八景あるをしらず。
さ称ハ近江八景をあふこ人がよしとえ。絵にかき老子の
筆をうつし、賛ハ其墨。墨田の病居の春色ともをばしらず。
自他共境乃俳を集て、すべて近江八景の一軸となし
二絶を許すめ是に自序をもとめ、江州の産蒲萄
坊の主人、隣千鄰筆をも猫ちる乃東軒によせ序。

四絶文章序

李由

四絶ハ古き井に四絶あり。絶ハ絶勝の義なるべし。
祖にハ艸字篆。二にハ揚揮豆。三に夫雲花園。四にハ
紫芝書なるべし。予問ずあるは四ヶ須弥の四別にある哉
四不拘四海四時四方の四なるぞや。曰。
不拘四恩四教の四にもあらず。四民四姓乃四の数にし
あるや。曰。不拘四天四駿乃四を称するハ。四王四皓の四にもあら
やむか。曰。不拘。此四禍として問をやめぬれ。許子が曰。
此別理屈ハ我有にあらず。差之絶不絶の謗誠あるハ
吾子が善用にまちあるに遠すべし。抑一二三四の事
あるにあらず。絶ハ四絶といふ也。むかし愚かなる法師あり。昔
才がしく法名の文字にくるしみ。あるへさまへく論
あひし法乃一字をかしらにかうふらしめて。下ハいろはを以て
法くべしと。法師皆まちうちをゆるして法以法呂と

頗ルに名づけて世上乃篇にのせらるゝ事は六の事にあら
ずつて附にかはりて賣買にかはりて法名をとふて法六
と改名してやうやうを妻子にかくれしは六をとい
はせの業ハ是非なし世々て来世にまよふ時は善悪を
まぬきらんと思ふて法師からはぬ事て家法名ハ其乃法文
いまハあるぞ今六の留書の外ハ是非なしと終に法名
なして後つもぬ今予が言絶もかく成てしとおのく
これをを感じて説賦銘賛乃言文を書して終り
不光志なとも其書中に一編の一章をくはへんとおそらく
その絶となりしんするを知らくやがて此文章乃始に序し
てせんをのべくば衆をおどろかしめる。

要文集序

許六

つくば山乃枝に鳥る小鳥ども法華経くと鳴かし是の
まそうれ秋をふかく呼ぶ声なりきさしとぞ鳴きる。百千鳥
くによおのか一声のおはがいれくる音声もきこゆ。鳥ぞ
かあしと啼鶯一雀のちいしと国しい鳴るに飽ず
やあれきけむやるとみけ法も理よむさるて、かあくちいて
よられが物志かくる数つなてそおりしられしを数つまき
そても国しいえれ鳴るふイヤポツパふくし可愛しい乃
かられめやあつまさむりしよくぞまちきなるきわつしかん
鸚鵡といふ鳥ハ人のいふるをよく真似するし世にまた

てち。私語を吹きわ。父母。爺。口異をとらくぞせきゝさかれバ
なれバ中よおもき税ばかりぞわ絹つて惟なりとがましも一銭を
もどりなとしはなし。父母乃恵つきぬまゝ嘴をもなくし
阿呆者诱鳥の真似を不絶とし。一生餓鬼くだく
そふる鵜ともなし。そらごとさらしかしと云ふわ
去る桁牛にある手なんる中霊を小石。己れを染の
言上とおぼして筆にまうせ書付る戯墨文集
とぞ申侍る。

画樓纈合序

許六

○和翁乃いましへ縁かく人の中よ木雑子家を焼て不動尊
乃好事をふるゝ。あるは他の家よ執き。漢土の万てし人く
画ふ子乃名を残せる人もありとかわ。当世の風情てあつ袖
をくれし。布袋。福禄寿の二尊をおもひして。あれは画師
乃一列よ入ず。前子となりかゝむ阿弥陀一字よ人家と
わし。へ泳よ筆跡をさめん。唐土乃志う人くそ。楼を造りて
人を掾ふて。起てむらん。魔を拂くきうん。おのが精神を画工を
猶とをくり紀て嵐を絶えをむへなるを。よ種画楼を造
らしむ。其家くし。さまざと流行先病ようつりて。纈子を
さ時は綿也。世の中。其異の二也。本序ハ寿き一。膠
こゝろきて恩くはなし。天下と二月く。水凍。やうしかじ
きて思くはなし。是を一もせよ十月乃梅子筆をさらしむ。

於雷西風書ハ一日の掛物にいと多きをおもひみ
花に砕し。此に戯れ。月に嘯ず。雪に吟じて。又
出く日もくれしかも庵し清朝の日あけゆく。思ひしほと
扉をとぢいれし。我を吸例の新客入らざりしあるに
興吟の酒飲。炭火におこりて、浮果ら、荘子が文字
しよくあり果てくじ三年の夜。頻に画像を造るおひき
さる方より此の絵にて蕉翁の言葉を被
くかし。其外あはれは日々像に乃自ものすゑに添
こりれ。人事の縁をぬし時。きハ先て此詞あれば集さる
も。二会乃暁を期きと泪して侍る。次の日来てやや
まての罪を責めむ。年か懐ふまむ人一生思ひくあと
三つまで。一生二生までの罪をとうむ。ゆゑに悔し、縁うる
頭に越て一生しといへども僕人はいくつやし。三五年の尺
冬年めせ。冬年縁る河々。七年乃月日也。十年の旅乃
時常れと志れべし。僕緣く門末に六人の影を探く。今
物山れ花会をうつも。各一軸を懐にして左右に列る。
真そに携る顔を寄せ。此撰にもれし門人まくありける。
二絵をも画像乃縁合とのみ撰じ来たし。許子六自
序作りく。五来る。鄭りなが標敬より。老曲師と
称せるのみ。于時元禄五年冬。十一月日書之

麻生行序

許六

麻生乃名を烏帽子折ともいふ。猶よく烏帽子
とはいはじの釈なるべし。すべて世の好嬌ひ乃
二つり流毛なく。天地思白乃さびしきさびし
嫌といふ人此乃好あればなかなかまた紀らぬ
好京の嬌哉ハ其の外の世しを好のふ仮成の鶉よ
以ても桃隠なきハむ。翁を毘翁とすれば見へ
粧ぎ詠の洒落よ及べし。晋子が傾惜よ。阿山人が
出女の鉛夕求して名護屋の柿乃。日の字おひたる

赤橋も乃こし事と同じ。又是おカキクケコなるべし
今前人ハがたい云し乃古事は。好よ秀烏帽子の。あらん
事を発明しられば。さ撰ハ撰者の花堂も。柳樽国の
人なれバ柳乃あらき事をも。此集よ撰ふべし也
俳諧大庭士跋る。

銀河序

芭蕉

北陸に行脚して。越後国出雲崎といふ所に泊る。
彼佐渡がしまは。海の面十八里。滄波を隔て。東西三
十五里によこおりふしたり。峯の険難谷の隈々
まで。さすがに手にとるばかりあざやかにみわたさる。

むへ此嶋は黄金おほく出て。あまねく世の寶となれ
ば。限りなき目出度嶋にて侍るを。大罪朝敵のたぐひ
遠流せらるゝによりて。たゞおそろしき名の聞え
あるも本意なき事におもひて。窓押開て。暫時
の旅愁をいたはらんとするほど。日既に海に沈で。
月ほのくらく。銀河半天にかゝりて。星きら〳〵と
冴たるに。沖のかたより。波の音しば〳〵はこびて。
魂けづるがごとく。腸ちぎれて。そゞろにかなしび
きたれば。草の枕も定らず。墨の袂なに
ゆへとはなくて。しぼるばかりになむ侍る。

「あら海や佐渡に横たふあまの川

番椒ノ序

野坡

「たうがらしの名を。南蛮がらしとよべるは。つまさが海世南
蛮よりや久しからし。からしのへ称。未詳。膀胱子。天竺きこえん
八なれ何ぞいふるぞ。おのがからきをぬめ人への鏡
びくをするなるべし。色やさしくしぬ名目ハ。渉がち渇
ありうるゝ秋ば。天資の穗の花ざかりしうちむへつるぞ
かまが身をうらはや。石臺に移されし秋く。竹縁の端の
しまあるハ。上しお仕合なれどもされば。擂鉢の目を砥底
めま海羅に培れて世の行のつまし。二階のつま。朝かし
但渡る年のかれすし。あやうきを凌し侍るを。胡のらん

さらバ一ツ酒もしおもハ゛酒太郎とハかづら甑つき甑乃蓋
厨ふかしづる也て貧乏徳の口紐うつくしみされとなり。
不食せう事お附。ふ器これなさ飢。お司くハ奴僕豆腐の
味おなぶのみ手を見ぬるを第一も乃最上としたりし。かくハいへ
ど、ある人ハ小野篁の道ハ酒よ。花の色ハ小蕎麦よ。こゝろ一
あられたへ゜満がまかとしひろみのわし緒下卯きしうす
あつしと出べし。此中しぞろるべなよつもあらためこゝろ。今ハ
なん人くさ出世をさつきつゞハ゜いよし被下もれむべし。
ぞかしろき同意なる人ハもとより序をたまう此事。
不意を読てぞ稲荷山